青山御流

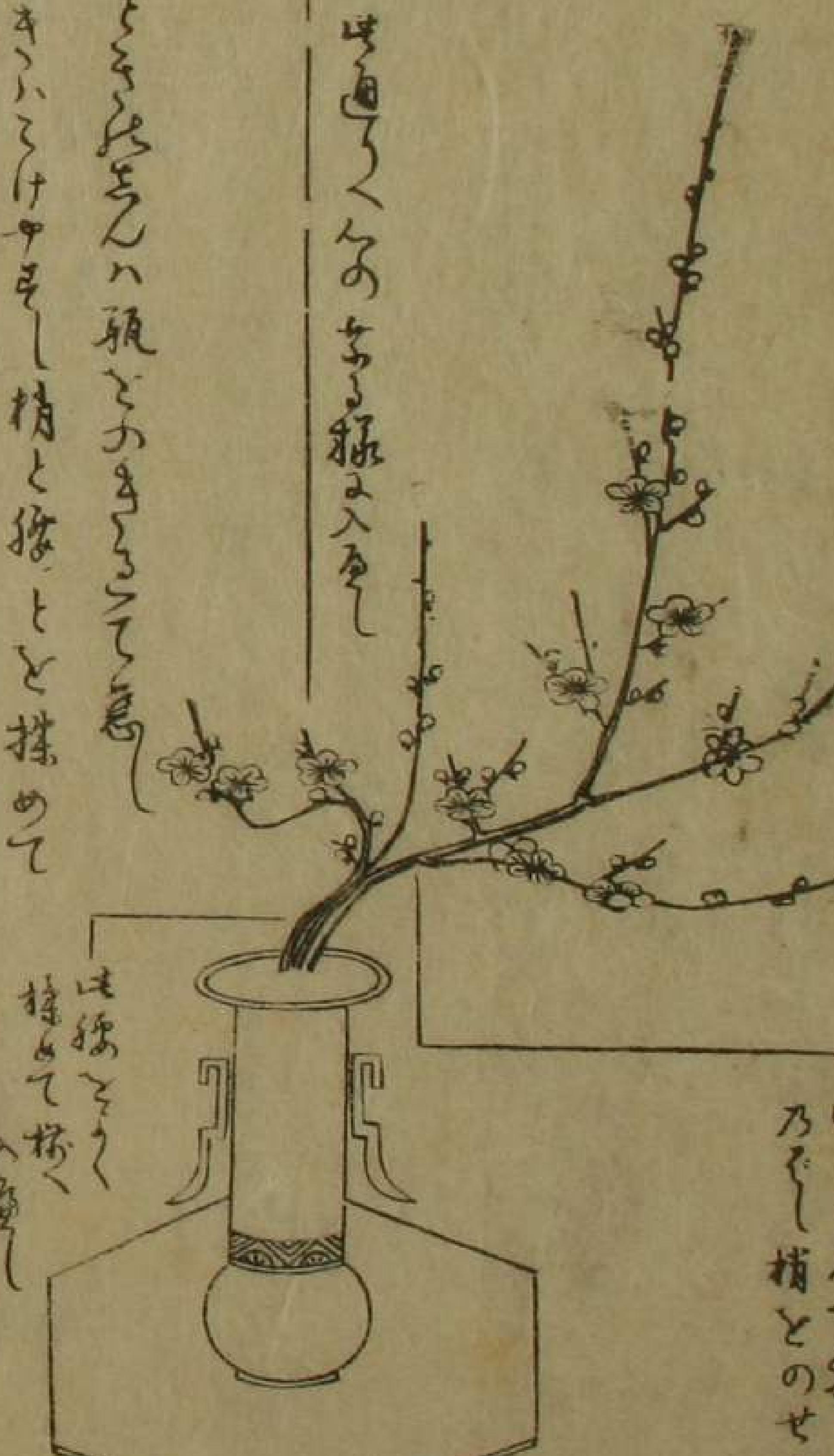
活花手引種前篇 二

ヲ多
2848
10-2

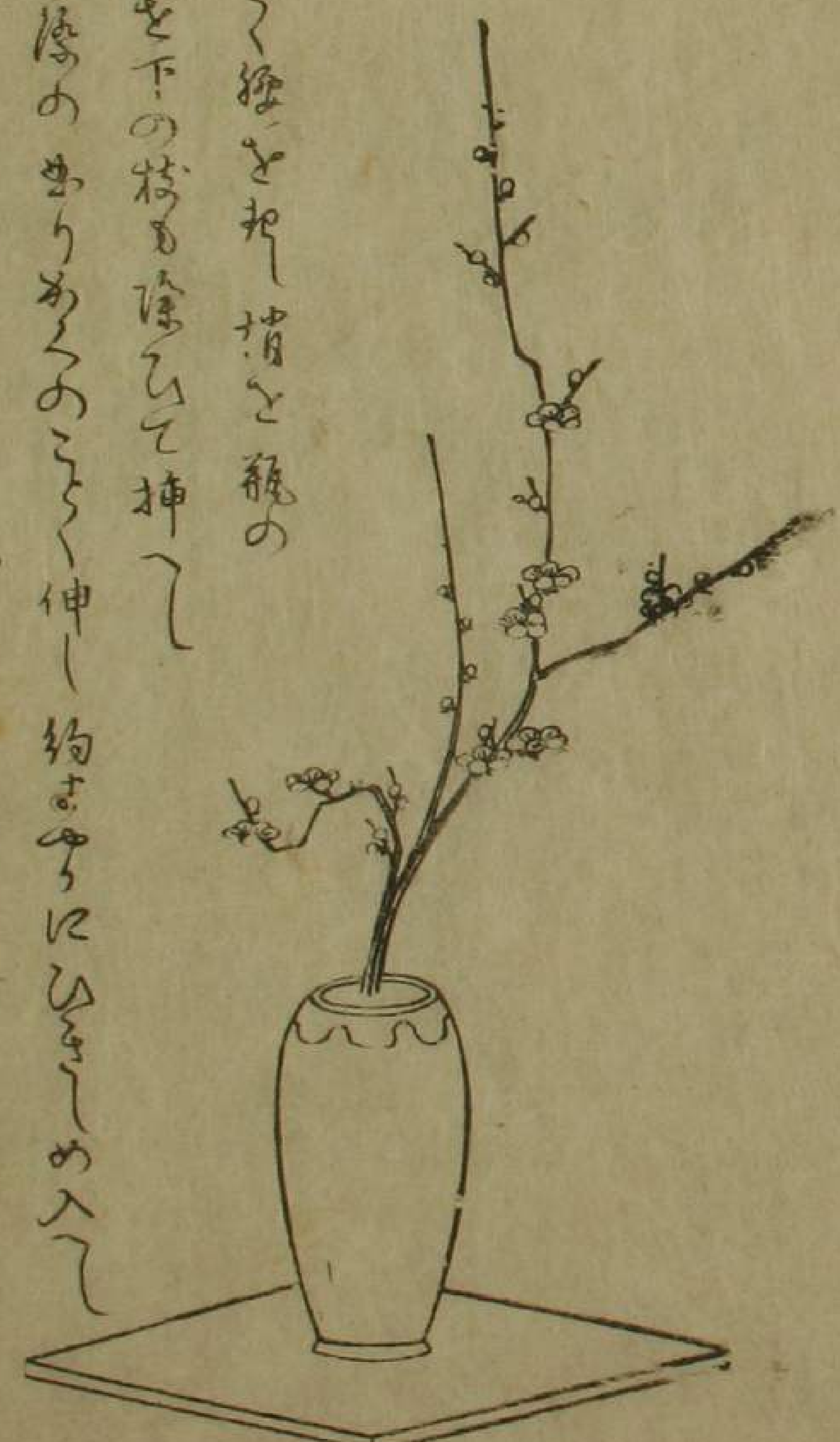
明治
2848
1-2

○此冊ものの巻ハ初心ハ挿絵ハ甚倭ものを図し
そ其ものとしほる形をほよ若く重もよりなり左右合考して
第後長短浅深高下ハ巻ものこし
○花實ハ春秋の次考をもて順をなし次されども大凡乃
ものて時候の遅速をあくこゝ次
○倭漢異名方言の類つゝひ〳〵ハ志るをハ混て却く
紊雜なるゝ故ハ耳ハ遠くきゝ婦ものるハ志るさ次きく
遠く稀なるもの〳〵同名異物の類と倭名漢名の次考を
撰ん次十ハ二三をとる次

かくのごとき枝ぶりハ瓶にかまはずして意し
其器細きハうけがたし梢と後とを揉めて
瓶の中ばかり通り入かたし まづ根曲げて水際
さかりがちくハなくきめて添へしたがへして揉おさへ据の残
いきほひめぐし 仕様委くハ初書に記せる何れも此意を推て入べし
などし 左なるハ [illegible]



梅



図のごとく後を押し梢を瓶の
中へ添を下の枝も除ひて挿へし
まへ水際のかりかくのごとく伸し 約まやかにひきしめ入へし
梅ハ新せる風情のよろしきハ大抵此趣をもつて挿べし
形の変化ハ四いたるべし

如図瓶により枝左巻へ出式ハ月のごとく出さし入るごとく長し
抱て掛瓶の地盤ハ出ぱくしく
函物は巻くト搭も弱まるに入る
ごとく宜し後のなごとくしてし

如是上より下枝ゆえ形なしあり
伸ひ出さる枝ハ悪しきに依
まて十文字ゆえ天てよあらん所
左の図を考へえし

白梅

山茶花（ツバキ）　海石榴（トモ）

以下通用ニ隨テ椿字ヲ用

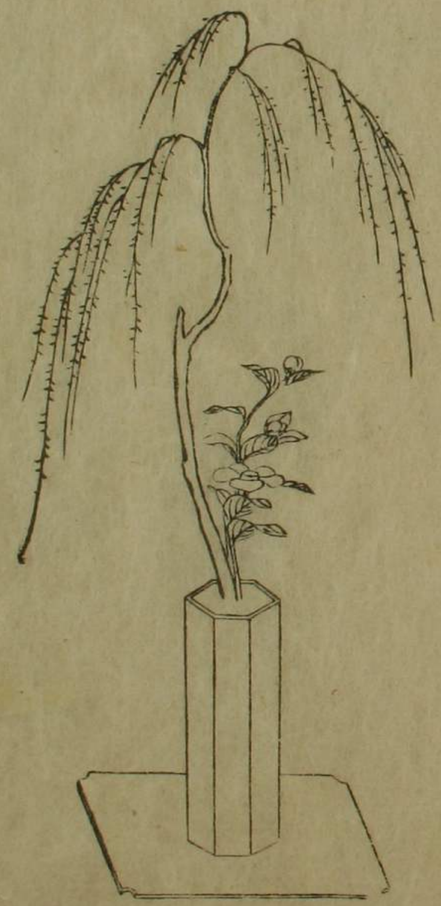
なくのごとく梅の梢ハ弱くのして
多像ふうひしく巻くしてみて椿ハ
一ぐよそうて巻くし

図のごとく何程風情形もよろしき茎器をえらびてふるべし
こゝに梅も產毛をもてなし添物もあるべきなり添こゝろ
よく添しめ〻ほのまことを考べし

梅　福壽艸　元日艸トモ　報春艸トモ

此艸茎の枝〻まことにいとのごとくとりけて入屋し
よろ〻福壽草を添ものかこれ逸ごとのみこと

氣條



青柳
つるな

あく柳の枝もそうし
つむきもつよすぎ入れ

みくよ、そこきらの柳ハ志ゝけりもき
樣ハ伸ひるゝ〳〵長し
なと左の方の方線と考へ

かく茎ちひして葉なきゝ細ハ仏よてる花を葉のあそりよ
みきゝ引つけて生なりおくこゝ後よ後く生る枝本赤
右くきよりこゝ入て意
いつまゝ一方へ
ゆくるゝ

かく梢のさ紀生る枝を深きつぼくのとこ海をきんとして
横きゝし えゝゝどきりて本を様めゝ引よ
ゝゝ多し但生ゝゝこいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

辛夷（コブシ）　もゝでゝがしゝ
木蓮（モクレン）
望春（ボウシュン）

如此ハそく枝ひ係おりて
あしく弱く枝の都ハそろえ
そろへ枝くそそうさび物
よみいハなり

あくまでかほそたるめもんよそくそくし生り小枝ハ茂けく
つきまるハ爲しまあひのあいうき
ちがうんよ準へし別体葉を考

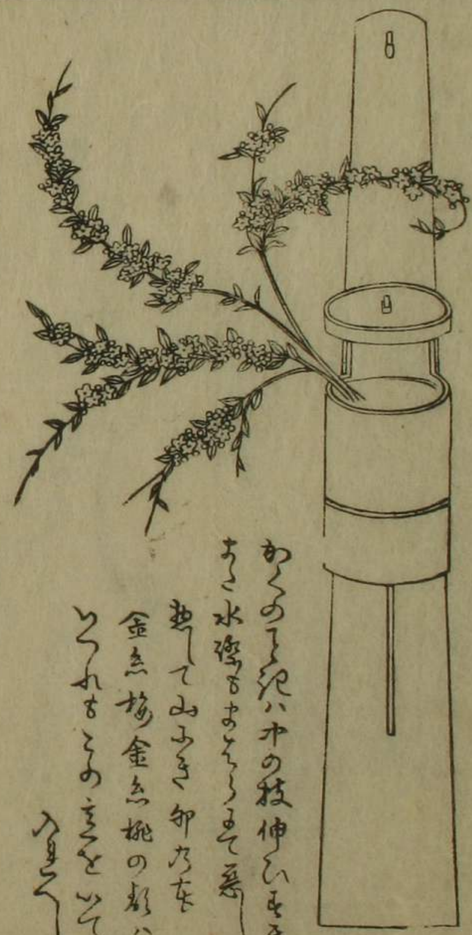
かく　なよびき　まもる
ちぶ　八仙　よ　ほ　枝　を　あと
まち　て　あ　ろ　ろ　と　ち　ほ　し　く　な　し
て　た　か　ね　つ　る　と　な　と　の　上　枝　は　大　ひ　な　る
時　き　器　の　こ　み　ん　と　る　ち　ほ　つ　る　部　し
ひ　の　も　し　と　ち　し

蘭　も　紫　組　部　れ
て　意　し

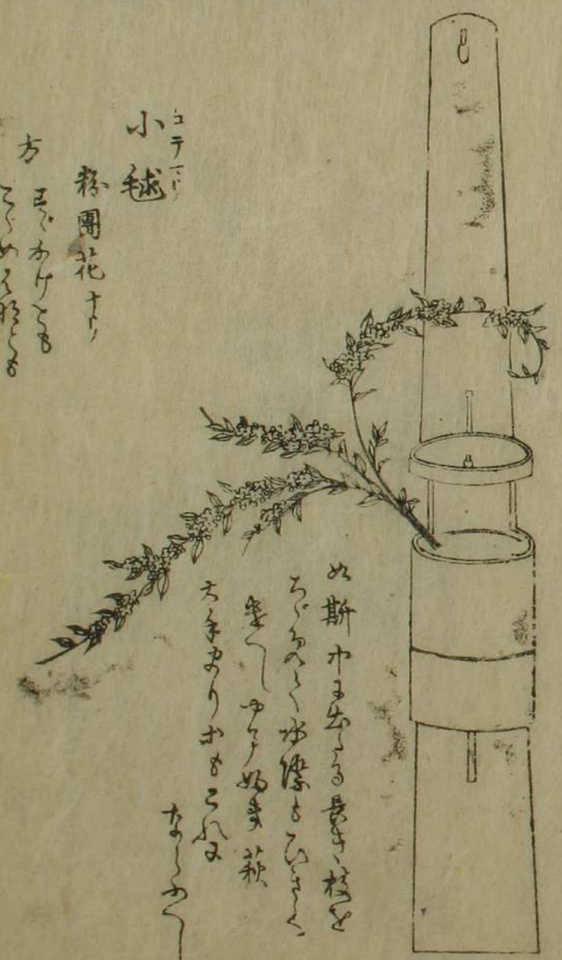
垂絲櫻（シダレザクラ）
無一絲海棠トモ
春蘭
燭頭蘭（トモ）

あく　枝　を　き　ま　て
風　情　き　よ　く　と　ひ　こ　よ　す　に　と　ん　ゆ　る　ほ　と
余　情　ふ　し

蘭　も　上　下　の　き　と　こ　け　て　な　し
か　な　と　な　き　の　こ　あ　こ　ろ　ろ　へ　あ　り



あくの子泡ハ中の枝伸ていきき
ちさ水湾をよそくしまて葉
数して山ふき卯の花を
金糸梅金糸桃の葉ハ
とくれなくこの葉をいて
入るべし



小越（コテ）

移開花すり
方 長くかけとも
こゝめくゝ移くる

ぬ斬中まをくる長き枝を
ちぐちぐ少深もひさく
生し やうり奴多 萩
大きゆりおもこふな
なゝめ

かくのごとくに増つよくして一山ふきのあるひく晴落し
わかえぐらい格別なあるき枝い　たなびく風情もとるとさるこ

外仲春れくるもれ
いつへる於的

ゆりぶきくはめくのごとく言下をひけき衣長経ゐ巻こし
たるとい葉葉ゐ芝ゐめくれる塚ゐ巻巻しそるゐ小まゐり
郭乃毛い萩ゐと　けなひひきもけいはまゐ同毒ゐ
ゐ清葉ゐ巻ゐあり

山姥き〜
棣棠ナリ
馬酸花トモ

そゝむかうていそきを今て出るとにはあゝ祝ぎあゝ表裏あゝ
大葉葉なくは陰陽のうちをそなへしものゝこゝゝ組くゝ
葉くしあゝ作るかゝもかくもあれ葉と出るは意きの図と考くし

大葉蘭
ヒトハ葉蘭トモ

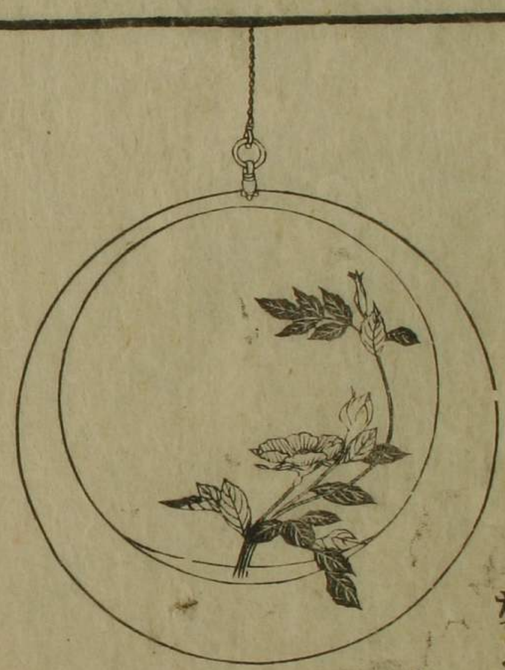
図のごゝく一方を仲ゝ一方を低めて入れしおき陰陽を
あゝくのごゝく組ゝこれをありは二株位ゝふたり左右曲直
を浮俯仰時宜を随ゝ又斗ゝしなゝを考へ図とゝゝふて

ぬ是ハ風情ハ松ゆしろがなんどを表裏のくゝ和
高しくゝ一体もゆるゝ是くゝ松ハ
ほそくとなんて

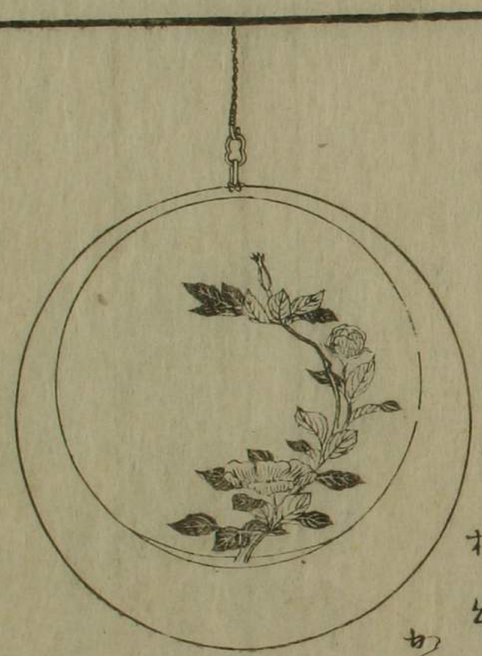
図のごとく陰陽を組紙を約まやうとう志ゐて生るゆゑ
かく根の細きものハ何ゆゑ沒多陽の強て高きハ悪し
ゆゑ体なくゝよりあり

海棠（カイタウ）

海紅トモ



枝葉あくまでもあらくとげ
ありて花の形小さきもの
あく籠のふちに
さしそへるもまたゆかし
あくしぼりたる
たもとのごとく長くおし
いでしまきぐしの
入たるいとくちの
夏の間をかし



薔薇（イバラ）　長春トモ
光影角し

あく月形器物などの糸形全体を
初め出し薄ひて入ハ撥別きぐ
如くあく入まる時ハ引きめて
ちゝくとまるゝ上下
月の輪の障つゝ
なゝぎるゝ輪の内
まて伸ちゝよし
和名薔薇とふく
雅へし

すく枝葉すくなひきるへあしくとゞれ
一すを傾ひく上下そて麁そゞしあらいなひきもよま
とり合きゆへきはくく生へし

紅楊櫨（ヘニウツキ）
錦帶花トも
海仙花トモ
十姉妹トモ
もこねくつえ

あく上下左右よふり合をて入へし
下枝沖妻萩なあく上をと欠合て
きてこそし

櫻艸を二株より組合なし

此水際にとり乱まさるハ毒
にくらす木の枝を深て水際の枝を
ほくて入まこと次を又〳〵

金雀花より
蹴躅花
稍形を

二種とも に あく 弱 ゆ さ る よ 入
さ ゝ ら 草 と あ く 組

櫻艸
さゝら菜とも

おくたちんみゝもとに生ずく葉ハ蓬よ生ハ長し葉と長く
茎まく形ゝ生ずハひろく葉ハ長く生ず
尚花のなくとしれ

芍藥
花相トモ
牡丹トモ

尚風情のあるものハ菊よ図く准し
淺の拳をなくし

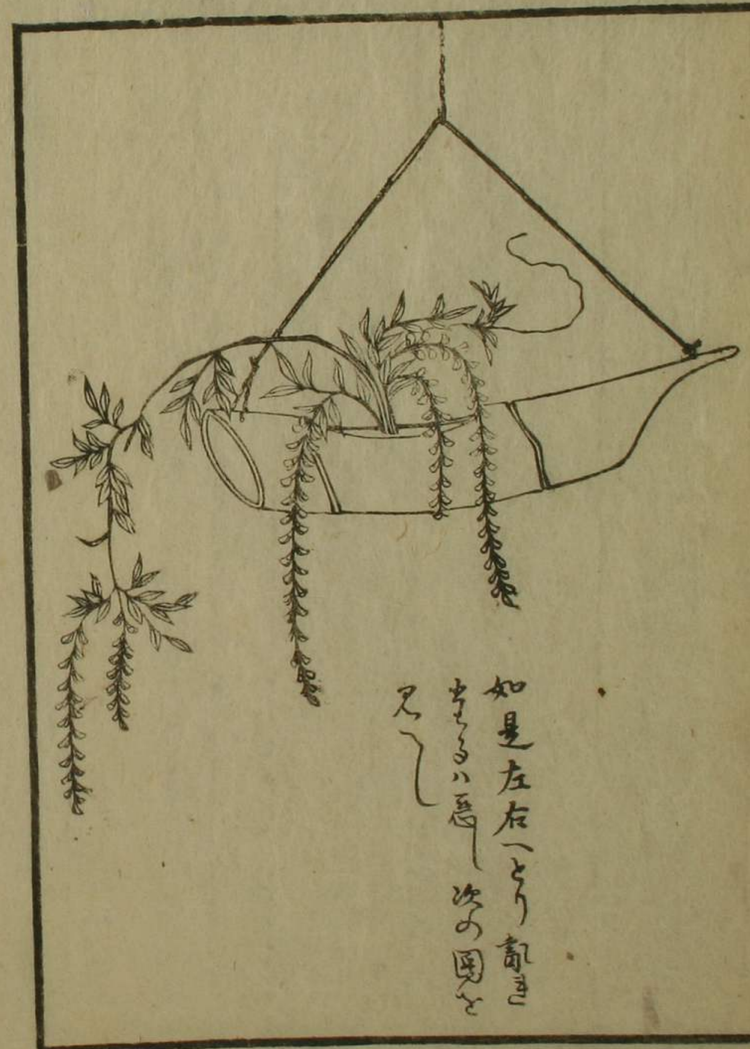
みくのごとくきれ指へ瓶上と濃色く長し次の枝を
きんとして指をきり去るく水際より長をのしめく水際の枝
なるもよく樗のごくもよを添し萩なと芝うつほるて
さるるあるべし

きりとて
映山紅

仙臺萩

活くらなるとめ色一色8よさ生してきるに酒
類いらめのるるざるもの本のうゆくよ生りお終を
と第くく入色し

藤 フヂカワラ



美人艸（ヒレンサウ）

麗春花トモ

錦被花トモ

如此ハ水際の葉根新しよく保つる芝を形もて
器をつぼ〳〵つくるべし次の図を
考へし

百合ナリ
山丹トモ

あく沙汰の
ゑをかるゑんいよそしと面しく考る勢ひ
よきゑをはるりとをそし

如是ハ素四方一ひろき茎ハ
乃り形しく長し次のなをしとろふく

いちさい
紫羅傘ナリ　かゝ[illegible]
鷲蝴蝶ーモ
鳶尾草ートモ

圓あつく　たくさんる長き茎とつあ右の
もの茎より准て花とかさし

あく表裏濃さくしまるい器し表を表
あしくらもらくあさねはぶこてを生へし
仲次と名くし

羌莪（しやか）
胡蝶花ナリ
鳶尾花トモ

あく表裏と生ぶし水濃と
つゞめて生へし名仲かさつくこと
准てなし

錦葵（セニアヲイ）

こあおとひとを

あく枝を表裏よりかへ招くとのごとき葉ぐりとりとるもとひ水漬ひきく入るべし

ぜに葵なぐあく丈高く入きるい高し枝茎くねりて深ひめきく風情絵しあよ形ひきく入るべし

手ある篭などハゐして小伸よ入れ於うくうつる

もよ形り次のきしとえるくし

好見二本樹八寸人を手あて長し弱よりも一本ゆへ家構高し
伸きらるゝと勇て活くしゆりよりきよそわ見てあ結らぼ
きんよなゝつて樹をくゝ
次をえくし

きらくしく水源の樹きくし樹をとりて活きくし樹をとハ樹を
きくゆゝ形りゆりよりまゝ結ゆゝ樹よりゝゝ也きくてきくゝあり
はおりこの主をとゝ対負ゆゝゝゝゝ
きくゝなるゝし

槙（マキ） 桜ナリ
くゝゝゝ紀ゝゝ
高野おきい
らゝんゝ紀
結らゝあり

ふとみたんきゝざ葉ばかり花としてあくまぎれとあしきてるゞ
ごゝく葦ゞくるる葉 葉ばかりとなくなる 陰地あり
うつくしゝと知るべし 余情あり

とうるつぼ

莞

燈心草トモ
江蒲艸トモ
ふとゐぬ
つくるる

澤瀉
慈姑トリ

勇刀艸トモ
燕尾艸

あくつまれたる花 あるいはあくまぎれとあて生ず おなじくうも葉ちと
一枝に茎をあらつて陰を見るなし 偶ふとゐ葉をうつわにおれ
やはくうあるをうつ又摘採やうとる 佳あり
江實菜堅油松葉 針ばかりと用るハ拙し

この菊葉よりつて高し茎ながらあるりあゝハまつゆる葉
全清薄し葉素のして中ほ葉と子のよゝへく
まゝ水際の葉まく斜めゆゝしゝんの蕚ること高
たの図とゝへく

外此類を推して見すべし

そんくるい州
熊野菊

此樹ハ古く枝を経るのゝちよく結トリ風体さびあるなり
中ほどさしつぎい様を水際の葉なとす
葉角く大くして次の図と
大くして

此是のうとたちびきをつけて茂し
戎葵さけ高く枝葉ちぢく茂多き時ハ
志ほれやすし 随分ちゐさくしてなるべきもの

蜀葵（アフイ）

戎葵トモ
一丈紅トモ
單重紅白數多有

きゝぼくゝゝゆ葉三枚までい茎一本うえてよし但三枚は一本
まてい四本となれども茎ゝゝゝ
凡きゝぼくゝゝゝゆい一撥ま葉
四枚まても茎い一本は別もくい
なり茎ゝ茎三ぶぬのゝなり
唐ま陰場の陰をい撥の
撥と爭なり落の圖ゝゝゝ

如是の杜若い葉組九き
て葉し茎の葉もあり
又ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
紙方初春まゝゝし

きゝぼくゝゝゆ

杜若（カキツハタ）

燕子花ナリ

劇草トモ　馬蘭トモ

二種とも茎葉の形もむゝ
如是当て葉の圖ゝ
ゝゝ

此時の姿組容もまた宜しかるべし
次の図を見よ

かく陰陽をさびし上下の様をとりてくもとし
さまざまの数ほまを図をなり
別体かくまあり

擬法珠（ぎほうしゅ）

玉簪ナリ　白鶴仙トモ　紫葵トモ　萱花　此字きくきをかるかせと

如是繁多なり且て葉し　ある大繁の数水陽子
低き所ハ下叫添く多きし落の図考し

カしハ
柏　ひめゆり
大葉擽トモ　山丹トモ
抱トモ

あく〳〵まるくとまるし　柏子葉しき
えだ〳〵ハかぐひく　水陽言く下草さ
乃〳〵て生くし

蒼菖蒲ハ牡若のごとく葉とがらして組へしかく一枝つ
伸くゝ枝ゝて組ゝるハ惡し故牡若より葉細くよろしき物
なくゝ葉の強きを撰くゝて葉へきの間とゝんて組へ

花菖蒲（ハナショウブ）
泥菖十リ
沼あやめとも

かく葉と組よんくうよろしし
別仕ハ牡若ト准ス

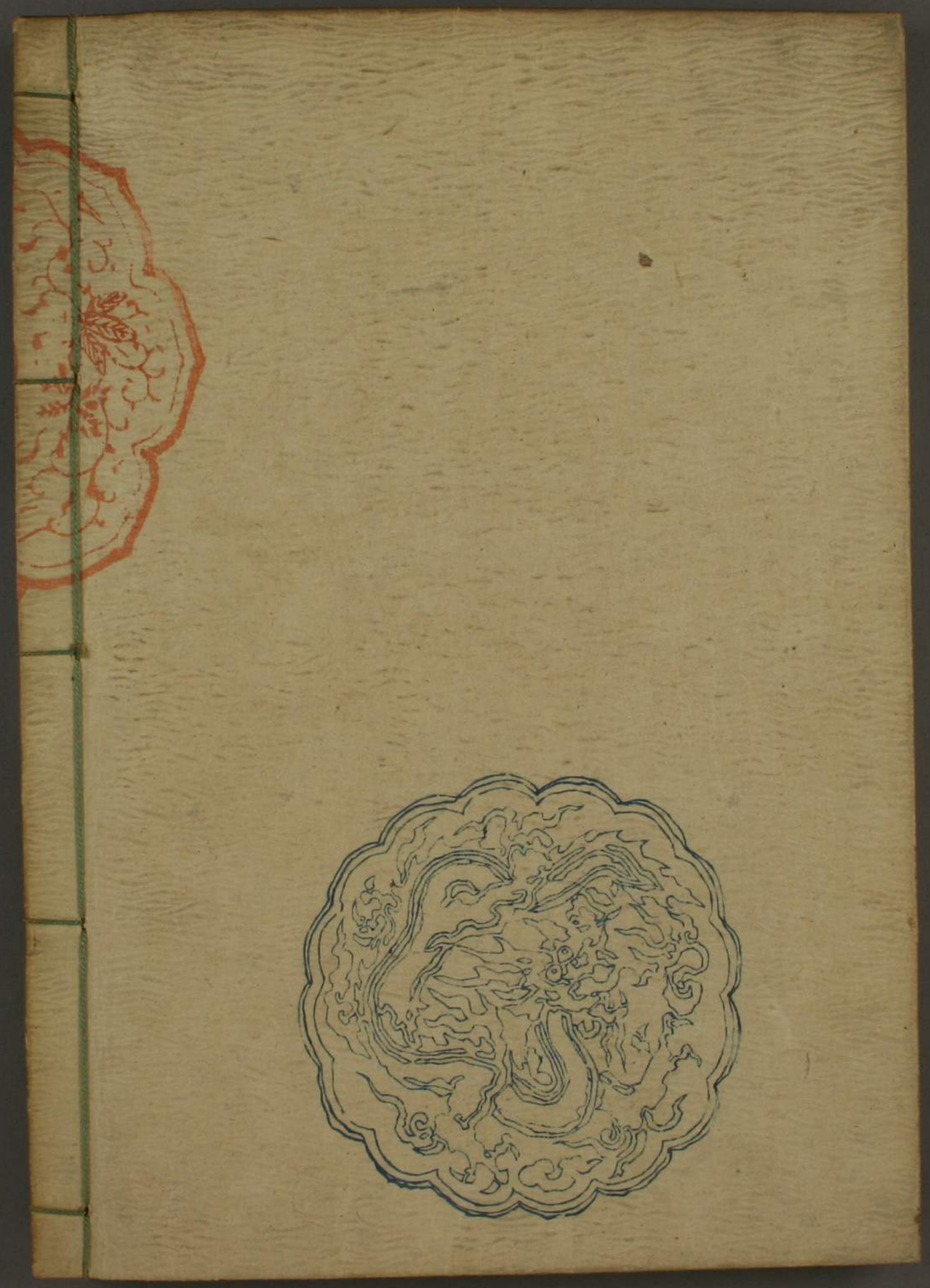
めゝ苔ぶちたちて茎は曲せきく葉の間無る
ものを押し伸してきはひゝ〳〵如ケて忘
たの事しとゝるし

アヂサイ
紫陽草
線繡花トモ
俗ニ七變化トモ

めゝ中ゝ下ゝとゝ中ゝとゝえんばゝり伸し葉もし
めゝ繁ぶりのえゝを落て茎の落を面と
補ふもし

百合
さゝゆり
思ひたにゆり
この作上二種いよりれどる瓶と
乃きるゝ〳〵悪し
左の図と宜し

園のうゝくんを瓶に多くゆりの枝を入る
或ハ枝を折りて形りとゝ生べしゆりの枝多し
伊れもこの心得を以て

馬盥轡留

馬盥轡留の稱ゝの傳説あれども當流あハもちひ給ふ所の器
新説の造りし器物なりとも名の授拙なれハ貴人方招請なと
於ては用ハ勿論常用の席といへども上の具なれ不審形ゝも
きりゝ止むことなくとりもちゆることゝありとても用ゆるの心みこと
ゝ説なるし きたて茶の湯のとゝ見よきゝにまゝくゝ見し 此分小刀とめ
くさり茶砂利とも解茶皆即茶の一無なり 仕様三巻目のま
まとゝるも 錄と名ハ仕方ゝ出所圓とゝて考くゝ